

南園文壇 第八號

和歌

「勅題」海上雲遠

かもめ飛ぶ海原遠く眺むれば雲間にみゆる有明の月 全 山下 梅香
 むら雲の入り目をうけてそまりける青海原に歸る帆の影 全 三好千鶴子
 たそがれの雲よりもるる月あかり海原遠くいさり火の見ゆ 全 本永 光代
 海上のかなたはるかに雲の群小舟のかげもうすく見えけり 全 山田 元子
 わたの原夕日に映ゆる濃雲のちびにみだれて色の美し 全 阿武 松子
 天の原淡雲たなびきはるかなる汐路に見ゆる沖つ島山 全 河村マサ子
 はてしなき八重の汐路を見渡せばはるか彼方に雲の波立つ 全 久保田澄子

雲遠く水平線もあざやかに夕日に匂ふ濱の夕暮 全 坂本 安代
 波さわぐ荒磯の海を眺むれば遙かの沖に雲の峯見ゆ 全 中村 美枝
 鏡なる海原遠くはてもなし汐路はるかに雲の漂ふ 全 山中 竹子
 青々澄みわたたりたる海上を小舟帆を駆け走り行くかな 全 新谷 治子
 海の上にたなびく雲の遠くして行きかふ船の影のさかなり 全 兒玉 睦子
 空はれて磯の香かほる濱つたひかなたの空に白雲ぞ立つ 全 吉原 秀
 雲遠く海はしづかにおさまりて初日を拜む今朝の芽出度さ 第二學年 沖田 澄子
 海原の彼方の雲を押開き搖ぎ出でたる朝日子のかけ 全 高崎 豊子
 大洋のはるかかの雲居ひらかれて東の國の日は出づるなり

さわやかに明け渡りゆく海原のかなたに雲のしづもりてあり 全 本永嘉代子
 白帆浮く大海原はさわやかに白雲いよよ遠くつらなる 全 高原美代子
 あさばらけ海の彼方の八重山のかすかに雲まがふなりけり 全 岩武 幸子
 海風きて八百重の汐路の島々のあたりにすめる初春の雲 全 伊東 輝代
 阿胡の海の沖津邊遠き島山に白雲浮きて陽ほのどかなり 全 江島 節子
 初日影八重の潮路を見渡せば雲井はるかに鳴山のみの 第三學年 朝枝 秀子
 わたのはら汐路はるかに見てあれば雲に消えゆく白き帆のかけ 全 藤田 静子
 松籟に磯打つ波の香も高く天雲遠し沖の彼方に 全 佐々木英子
 瑞雲のしるしは御代のみいつにて遠くあまねし雲の上まで 全 久保田澄子
 海原の彼方に見ゆる島影に白帆とまがふ雲ぞありける 全 藤井ヤス子
 黒雲の空をおほひてはるかなる水平線に波立ちわたる 全 藤井ヤス子
 君が代を祝ふがごとく朝日かけにほひ初めけり海の彼方に

秋の空うつして澄める海原に白き帆かけや遠くうかべり 全 松浦 静子
 ほのぼのし明けはなれたる海の上に雲たなびける元日の朝 全 三好 泰子
 淡雲の遠くなびきて白き帆のうなばら遠くかすみゆく見ゆ 全 守永 良子
 曉の荒磯の濱に竹めば遠く湧きたつ雲の雄々しさ 全 山本 芳江
 はるかなる沖のかなたの雲遠し若き乙女の望にも似て 全 上野 薫子
 わたの原はるか彼方を行く雲と見ゆるは田鶴の飛びて行くなり 全 藤山喜美枝
 大わたを小舟あやつり行く程に見ゆるは遠き雲のかけはし 全 野村 久子
 はてしなき海上はるか雲遠くみいづの光永久にかぎやけ 全 吉村 絹子
 立ちさわぐ波のしづきを身に浴びて雲に叫べる濱千鳥かな 全 貞明 文子
 晴れし日のさゝ波寄する海遠く雲は果てなし遙か彼方に 全 佐伯スミ子
 ほのくさ明け行く沖の彼方より雲流れけり東をさして 全 塩屋 琴江

發行所 山口裁高等女學校南園會
 山口縣萩市五町
 印刷人 野村盛一

伊藤 綾子 あらたまの年明けゆきて沖つ島はるか
 かなたに雲の漂ふ 全 岡 益子
 沖つ波はるかにつゞく天の原雲のまに
 々々青き空見ゆ 全 岡部巴岐子
 ほのぼのと明けゆく海の沖遠く朝焼し
 たる雲一つあり 全 岡本ヨシ子
 海原の彼方たのたふ浮雲の美しく見
 ゆ秋の夕暮 全 高津美代子
 見渡せば沖つ島山かけみえて天ぎは遠
 く浮ぶ白雲 全 第四學年 秋山集義子
 かぎりなき四方の海原明け初めて仰ぐ
 御空に雲ぞたなびく 全 諫早スズ子
 初日かけ大海原に雲遠く御代の榮えを
 壽ぎてみの 全 大島 清子
 荒海の名残の磯の松風に冷たき背の雲
 遠きかな 全 金子 清香
 七重八重波立ち起こる海の面のはるか
 に靡く白雲の原 全 佐古 淑子
 治まれる御代のしるしの朝なぎに海原
 遠くなびく白雲 全 佐々 木琴
 東海の雲はるかなるこつ國もすめら御
 國の光かやく

重見ミヲ子 島山の船の煙にまがひつゝ八重の潮路
 に浮ぶ棚雲 全 羽柴 久子
 日の本のほまれを積みて輝ける出船に
 遠く海の上の雲 全 馬庭 芳枝
 白雲の一すぢはるか海の上に二つ三つ
 みの海人の釣舟 全 有田 マツ
 うち仰ぐ空の彼の雲間よりあしたの
 海をてらす日の影 全 安藤 政江
 わたの原汐路はるかに見渡せば雲とも
 まがふ島山のかげ 全 池内千代子
 ほのぼのこ明け行く海の彼方には雲間
 にうかぶ白帆三つ四つ 全 上野喜久子
 海原に照らす光の美しく遠き空には雲
 一つなし 全 木下 静子
 澄みわたる空のはるかに眞綿雲遠く海
 原かもめこびをり 全 兒玉 芳子
 海上の遙か彼方の蒸汽船雲ともまがふ
 白煙かな 全 小山 元子
 雲遠く日路はるかなる海原に國の誇の
 いくさぶね見ゆ 全 塩田 園子
 白波の朝の光にてりはゆる海上遠し雲
 の嶺かな

田坂美代子 海上に静かに浮ぶ白帆にも朝の光は雲
 間よりさす 全 田中 愛子
 海上の孤島の上にたすみてはるか彼
 方の雲を眺むる 全 長澄 靖子
 君が代は海原遠く明けにけり秋津の浦
 に白帆浮びて 全 野村 節子
 雲遠き海の彼方にみ光のあまねく渡る
 君が御稜威は 全 廣石 幾代
 小春日の波路はるけ行く舟にそひて
 走れる一片の雲 全 藤井美彌子
 鹿島立つ若人の乗れるその船は雲ミ水
 との中に消え行く 全 山縣 操子
 波たぬ海原のどかに雲遠く御代の光
 にかぐやきにけり 全 吉田ユキエ
 沖つ島雲影見えてうらゝにぞ朝日映え
 して白帆行きける 全 石川日出子
 果しなき海の彼方に雲浮きてすなざり
 舟の磯へ漕ぎ行く 全 菊屋 定子
 海原に澄みにすみけり今日も亦見島は
 雲をなびかせてたつ 全 竹下 泰子
 松嶺に夢さまされて外見れば波立ちさ
 わぎ白雲の見ゆ

橋本美津子 荒磯の磯山おろし音高し海原遠く雲の
 湧き立つ 全 早川 澄子
 海原はのどかに晴れて浮く雲にはるか
 に聞ゆる船帆の聲 全 原田 久子
 有明の小波立てるわたの原白雲なびく
 朝の潮風 全 藤田ヒデ子
 わたの原霞める彼方白雲の波と覺えて
 鳥の飛びかふ 全 三上 安子
 日の本の大海原は清らかに天雲遠く白
 帆漕ぎ行く 全 箭島 文子
 大き日にかぐやき渡るわたつみの空に
 見ゆるは遠き雲かな 補習科 赤間あき子
 初日影さすや静かに寄る波に啼きてむ
 れとぶ濱千鳥かな 全 上利 愛子
 初日影さすや静かに寄る波に啼きてむ
 れとぶ濱千鳥かな 全 岩崎よし子
 長々汽笛ならして行く舟のあき静か
 なり島をめぐれば 全 岩武 知子
 朝日さす大海原のあまほらけ雲かこま
 がふ沖つ島山 全 伊藤登美代
 初春の御代祈るらし東雲の海路はるか
 に千鳥なきをり

井上 君恵 はまかぜに吹かれていさむわが心のぞ
 みは遠し波のかなたに 全 井町タマ子
 大海の海路はるかな鳴影に朝日照りそ
 め波の美し 全 上田 静江
 廣々目じはるかなる船路かな雲のい
 づくに影やのこせる 全 岡田 公子
 凄まじき浪もいつしかをさまりて海原
 遠く雲ほのかなり 全 大深 芳枝
 初々しき湖のしぶきにかゝりつゝ夕陽
 の沈む海を眺むる 全 紺碧の海路漕ぎゆく舟一つ雲のかなた
 に今や消え行く 全 河野 幸子
 遙かなる海の彼方や瑞雲のなびく姿ぞ
 雄々しかりける 全 木村のり子
 えも云はず美はしきかな沈みゆく陽に
 照らされし四方の雲山 全 兒玉 信子
 雲晴れて波静かなる菊が濱白き帆船の
 二つ三つ見ゆ 全 瀧野 和子
 朝まだき波の静けき磯邊にて黄金色な
 る海の香をかく 全 篠原 敏子
 いよゝゝにかすめる水際の雲さけてか
 ぐやきそめし初日かけかな 全 小春日の波一つなき大海の鳴山かすみ

重見ミヲ子 白帆たゞよ
 大海の波 黄金におりなして日路はる
 けくも明けそめにける 全 中野 愛子
 そよ風の海原吹けばいつしかに鏡さ
 りて雲ぞたなびく 全 長岡壽枝子
 なごやかな海路出で行く帆かけ舟のあ
 みに瑞雲たなびきにけり 全 白き帆に春風うけて漁舟の鳴の彼方に
 見えかくれする 全 花田きみ代
 ほのくゝと海原さほく明け初めて黄金
 の雲ぞ立ちこめてける 全 波多野馨子
 見渡せば水や空なる沖つ波に溶けて消
 え行く白帆影かな 全 藤井 文子
 波立たず静けき朝の海原やかもめ飛び
 のく雲の彼方に 全 山口屋郁子
 ほのくゝと早や明け行きて海原の波も
 静かに漁舟こぎゆく 全 村田 錫子
 はてしなき海雲昇る偉大さはいや増す
 國のさかゆる如し 全 木下たか子
 波をさまり初日めでたく射しそめて御
 代こまほくや鳴まひをり 全 第一學年 松原 澄江
 教室の窓より見ゆる一本の柿は日毎に
 落葉してゆく

田坂美代子 海上に静かに浮ぶ白帆にも朝の光は雲
 間よりさす 全 田中 愛子
 海上の孤島の上にたすみてはるか彼
 方の雲を眺むる 全 長澄 靖子
 君が代は海原遠く明けにけり秋津の浦
 に白帆浮びて 全 野村 節子
 雲遠き海の彼方にみ光のあまねく渡る
 君が御稜威は 全 廣石 幾代
 小春日の波路はるけ行く舟にそひて
 走れる一片の雲 全 藤井美彌子
 鹿島立つ若人の乗れるその船は雲ミ水
 との中に消え行く 全 山縣 操子
 波たぬ海原のどかに雲遠く御代の光
 にかぐやきにけり 全 吉田ユキエ
 沖つ島雲影見えてうらゝにぞ朝日映え
 して白帆行きける 全 石川日出子
 果しなき海の彼方に雲浮きてすなざり
 舟の磯へ漕ぎ行く 全 菊屋 定子
 海原に澄みにすみけり今日も亦見島は
 雲をなびかせてたつ 全 竹下 泰子
 松嶺に夢さまされて外見れば波立ちさ
 わぎ白雲の見ゆ

補習科 木村 範子
 コスモスを愛でにし君のみ姿の學びの
 園に見えぬ代びしさ 全 久留米にて(三勇士の銅像に詣てて)
 ものゝ魂は散れども爆弾にすがれ
 る三人の姿雄々しも 全 水前寺にて
 夕霧の烟る芝生に白鳥のさわぎて暮れ
 ゆく水前寺かな 全 鹿兒島にて
 城山の松の入り影消えて時雨をめけ
 り夕風して 全 くるがねの膚に響ゆる櫻島おぼろに見
 えぬ雲の絶えまに 全 別府にて
 湯の里の狭間々々にいでゆして眞白き
 湯氣ぞたちのぼりける 全 第一學年 上利 俊子
 歸省してまゐし祖母の笑顔かな 全 下瀬 輝子
 杉垣にかくれて赤きまんじゆしやけ

神田 富子 遠足や土手一面彼岸花 全 末益フミ子
 初秋や野邊一面に彼岸花 全 石川眞砂子
 稲刈のあとに捨てたる案山子かな 全 驛元 弘子
 水仙が一輪一輪猫ちぢこまる 全 土井 貞子
 雲掩ひてにはかに昏し冬の午後 全 平田 和子
 花鳥に夕陽をあびて菊は映ゆ 全 村上 静子
 海上をはるかに走る木の葉舟 全 第二學年 高原美代子
 貼りかへし障子に冬を待つ心 全 本永嘉代子
 朝寒や庭にゑがける帚あと 全 宗樂 明子
 炭がまの煙たゆたふ冬の山 全 安永 英子
 枯れんゝの野面のすゞき秋の暮 全 沖田 澄子
 ガス燈の影かすかなる慈善鍋 全 金田 千里
 一ひらの雲さへなくて春の海 全 第三學年 河村 雪子
 大洋の果てまで續く空の雲 全 高洲 富子
 天高く雲浮び行く秋の空 全 竹田 伸子
 秋風に窓邊のテブゆれにけり 全 吉武マサヨ

俳句

秋の山見渡す限りの唐錦

第四學年 坂 幸子

南園に乙女の生けし菊薫る

全 重見ミヲ子

盆栽の檜木の蔭も紅葉せり

全 今田 静子

秋の庭ひな菊一輪落ちて散る

全 池内千代子

廣々と蓮の枯葉や秋の月

全 口羽 理子

虫の音もかそけき秋の夕べかな

全 中島 久江

阿武川に病葉流して暮るゝ秋

全 吉田ユキエ

せきれいの尾上げ下げする刈田の面

全 齋藤 芳枝

こほろぎの聲もさやけし秋の月

全 田總セツ子

荒れはてし城趾に一本すゝき哉

全 松原 君江

秋晴に思ひ出さるゆきし人

全 楊井 虎子

虫の音に誘はれて出る秋の月

全 柳井 柳子

秋晴に高くひらめく日章旗

詩

第二學年 米 屋 照子

ゴーツ。あ、汽車が……

飛乗つて懐しい故郷へ……

歸りたい……

海邊の松、ほのほの温い温泉。

父母兄弟お祖母さんにホチ……

もう見えない。

汽車は行つた。

ああ!! つまらい

流れにさく

第四學年 藤井美禰子

流れは沈黙の哲人

永久に變らぬものを

月日は流れて

新しい世を創造する

南園のよはひ

二十三年

今川を望む我も

流れは知つてゐる

人をうつし

學び舎をうつす

流れに聞かんそのかみの日

流れよ又黙して

榮えを見守らん

文

偶 感

第三學年 木下 文子

幸福を物語る春、春に恵れぬ人間こそ不幸である。我等は幸福である。世間には運命の爲はかない人生の行路を辿る氣の毒な人もある。運命は我々の幸も不幸も皆此の二字に盡きるのである。或人は運命に泣き或人は幸福感に微笑む。色々様々な世相を神は如何に見られるだらうか。我等は幸に今は只幸福な春風に

酔つて恰も大空に飛翔する小鳥の様に愉快な明朗な日々を送つて居る。

運命を裁く神よ、永久へに我等に幸を興へよ。否全人類に幸福の光を放て。

田園小景

第四學年 石川 日出子

今宵又雨の降るらし空模様

夕風寒く吹き出しにけり。

稻田を見に来たらしいお百姓が二人空を眺めながら話してゐる。

「今年はいゝあんばいに二百十日があれなかつたが、二百二十日も風が吹かなければえ、

が」

「うん、今頃あれるに困るでう」

話は此の六七日の中に迫つた二百二十日の事らしい。

空を見れば黒雲がもくもく湧いて颯つと一陣の風が吹いたと思つたらもう雨だ。

「ア、夕立だ。洗濯物を入れなければ」と言ふ聲が何所からも聞えて来る。

がら／＼と雨戸を締める音が騒々しい。

何所かで雷鳴の音も聞えて来る。

人生の推移

補習科 岡 安子

二人の夕食が私の前を歩いて行きます。二人は何處から来たのか、又何處へ行くのか彼等も知らず又私も知りません。只ぼ／＼と夕日の沈む彼方へ危い足取を運んであります。淋しい晩秋の夕日は隠れました。そして美しい月は出ました。

けれどもそれは二人をなぐさめる程のものではありませんでした。側目も振らず上も見ずに、月の彼方にしょんぼりと消えて行きます。

あ、これが社會の敗殘者の姿なのでせう。其の後姿には今も尙やへさせられます。目的なしに生きてゆく者の最後の姿や、何と云ふ淋しい悲しい姿でせう。これも人生の或る姿なのでせう。

明日ありと思ふ心の仇欄

夜半に風の吹かぬものは

實に人生は寸善尺慶である。昨日今日、樂しく何の不足、不満もなく活してゐたものが、一夜の中に怒濤の中に落ちる者もあるのである。行手に如何なる悲劇！罪惡！惡魔！が待ち伏せてゐることも知らないで、唯、一時の享樂！嬉しさの誘惑に集中してゐる者の如何に危険なることか。

苦しい後に嬉しい事のおどつれ、又嬉しい事の後に来る苦のおどつれ、即ち「苦の後に樂あり」「樂の後に苦あり」の格言も又、人生の變化の一部分だとも云へよう。夕食は今ばかりはなつてはゐるけれども、寸前には如何なる當業の主人だつたかも知れない。思へば人生の推移こそはただ神のみ心まかせになるより外には仕方がないのであらうか。しかし此の變轉があつてこそ、始めて人生は愉快でもあり、有意義でもあり、我等の活動も亦、に新生命が見出たされるのである。

萩市の人口

(本年國勢調査の結果)

舊萩	三、七七一	世帯	一、六、六九二
棒東	一、九六八		八、九七一
棒西	五二四		二、六〇〇
山田	八七〇		四、一三六
水面	二七		一八七
計	七、一六〇		三二、五八六

昭和十年十二月十八日印刷
昭和十年十二月廿三日發行
山口縣立萩高等女學校內
發行兼編輯人 神田 信明
山口縣萩市